

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：11501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25885010

研究課題名(和文) 母親の子ども表象と子どものアタッチメント：妊娠期から生後6歳に亘る縦断的検討

研究課題名(英文) Maternal representations of their child and their child's attachment security: A longitudinal study from pregnancy to 6 years of age

研究代表者

本島 優子 (Motoshima, Yuko)

山形大学・地域教育文化学部・講師

研究者番号：10711294

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、妊娠期における母親の子どもについての表象が生後1歳半及び6歳の子どものアタッチメントとどのように関連するのかについて実証的検討を行った。その結果、妊娠期において子どもについての表象が「安定型」であった母親の子どもは、「非関与型」や「歪曲型」であった母親の子どもよりも、生後1歳半時点でのアタッチメント安定性が有意に高かった。しかし、生後6歳時点においては、こうした有意差は見られず、妊娠期における母親の子ども表象の長期的予測力は認められなかった。妊娠期における母親の子ども表象が子どものアタッチメント発達に及ぼす長期的影響力については今後さらに詳細に検討を加えていくことが必要である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to examine the relation between prenatal maternal representations of the child and subsequent child's attachment security. We used the Working Model of the Child Interview to assess mothers' representations of their unborn infants during the third trimester of pregnancy and the Attachment Q-set to measure their child's attachment security. Results showed that the children of mothers with balanced representations during pregnancy were more securely attached than the children of mothers with disengaged or distorted representations at 18 months, but there were no significant difference between the children of mothers with balanced representations and the children of mothers with unbalanced representations at 6 years. Further researches will be needed for examining the longer effects of maternal representations during pregnancy on child's attachment development.

研究分野：発達心理学

キーワード：子ども表象 アタッチメント 縦断研究

1. 研究開始当初の背景

近年、親子関係における主観的側面の重要性が、臨床的にも実証研究的にも、ますます認識されるようになってきている。臨床領域では、親の表象は親・乳幼児心理療法における主要な要素の一つとして位置づけられており (Stern, 1995) また実証研究的にも、これまで客観的現実と比べてバイアスを含んだものとして過小に評価されてきた親の主観性が、それ自体、価値ある研究の対象として注目され (Zeanah et al., 1990) 現在、急速な勢いでその体系的検証が進められている。特に、アタッチメント研究領域では、旧来より重視されてきた一般的なアタッチメント表象 (Main et al., 1985) に加えて、親が子どもとの関係性において形成する、より関係特異的な子ども表象 (子どもや子どもとの関係性についての主観的な経験や知覚; Zeanah & Benoit, 1995) への関心が高まっており、その実証的研究が急速に進められている。

こうした一連の研究結果から、大変興味深いことに、母親の子ども表象はすでに妊娠期の段階から発達しており、出産前からかなり明瞭なたちで想像上の子どもについての知覚やイメージが形成されていることがわかってきた (Benoit et al., 1997)。この母親の子ども表象は、一見すると出産を機に大きく再変容・再構築しそうに思われるが、実際には、妊娠期から出産後にかけても相対的に安定した形で連続し (Theran et al., 2005) 出産後の現実の子どもに対する知覚や解釈といった主観的パターンを方向付けるといふ (Benoit et al., 1997)。さらには、妊娠期における母親の子ども表象が生後1歳の子どものアタッチメントの質をも予測し (Huth-Bocks et al., 2004) 妊娠期に安定したタイプの子ども表象を形成していた母親の子どもは、生後1歳において安定型のアタッチメントタイプを示す割合が高かったことが報告されている。

このように、妊娠期の母親の子ども表象が後の子どものアタッチメントを予測するというきわめて興味深い結果が得られているわけであるが、それがなぜ、あるいはいかなるプロセスやメカニズムを通して子どものアタッチメントに影響するのか、その詳細については十分に解明されてこなかった。そこで筆者は、主要な媒介要因として、母親の養育行動 (感性等) を想定しながら、妊娠期における母親の子ども表象が出産後の養育行動を媒介として、子どものアタッチメントの発達にどのように影響するのか、社会家族的要因 (夫婦関係等) や子どもの要因 (気質等) 母親の要因 (抑うつ等) をも考慮に入れながら、そのプロセスやメカニズムについて解明することを目的とした縦断研究を行った。その結果、妊娠期における母親の子ども表象が出産後の母親の養育行動に影響し、ひいては子どものアタッチメントに影響す

るプロセスが見出され、母親の養育行動が媒介的役割を果たしていることが見出された (Figure 1)。また、子どもの気質や母親の抑うつ・不安、そして社会家族的要因もまた、直接的、間接的に子どものアタッチメントに影響を及ぼしており、それらが複合的に重なり合いながら、子どものアタッチメントの発達を規定していることが推察された。

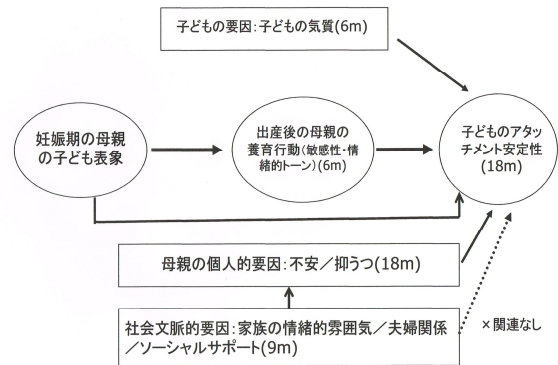


Figure 1

以上より、妊娠期の母親の子ども表象が生後1歳半の子どものアタッチメントと関連することが日本人サンプルにおいても確かめられ、さらにはその影響プロセスの詳細についても明らかにすることができた。しかし、国内外を問わず、妊娠期の母親の子ども表象についての研究は、生後1歳あるいは1歳半の乳児期までの短期縦断研究で終始しており、乳児期以降の長期にわたる縦断研究は未だ行われていない。妊娠期の母親の子ども表象が後の子どものアタッチメントに、少なくとも乳児期にわたって影響力を持つわけであるが、それが乳児期以降においても長期的な影響を持ち得るのだろうか。もし幼児期の子どものアタッチメントに対しても長期的な影響を持つならば、妊娠期の母親の子ども表象が子どもの発達に果たす役割の大きさが実証されることとなり、大変興味深い。そのため、幼児期の子どものアタッチメントに対する妊娠期の母親の子ども表象の予測力について検証することは大きな意義があると思われる。

また、これまでの研究では、娠期における母親の子ども表象が子どもの発達に及ぼす影響として特にアタッチメントに焦点が当てられてきたわけであるが、アタッチメント以外の子どもの社会情緒的発達 (情動理解・問題行動) についても影響を及ぼし得るだろうか。この点については、まだ検証されていない課題であり、妊娠期における母親の子ども表象が子どもの発達の何に影響を及ぼし得るものなのか、今後さらに明らかにしていく必要があると思われる。

2. 研究の目的

以上を踏まえて、本研究では 2006 年度よ

り開始している妊娠期からの縦断研究をさらに発展させ、特に以下の二点を明らかにすることを目的として、妊娠期から生後6歳にわたる追跡調査を行う。

妊娠期における母親の子ども表象が生後6歳の子どものアタッチメントと関連するか

妊娠期における母親の子ども表象が子どもの社会情緒的発達(情動理解・問題行動)と関連するか

### 3. 研究の方法

#### (1) 協力者

妊娠期からの縦断研究に参加している関西・北陸地区在住の協力者を対象とする。これまでの調査時期は、妊娠後期・生後2ヶ月・6ヶ月・9ヶ月・1歳半・2歳半(すべて家庭訪問による調査)および3歳半・6歳(郵送での質問紙調査)であった。調査開始の妊娠期の時点での協力者は母親50人であった。

#### (2) 測度

母親の子ども表象(妊娠期)

親の子ども表象を測定するツールとして、Zeanah & Benoit(1996)の Working Model of the Child Interview(WMCI)を使用した。WMCIは、子どもや子どもとの関係性に関する親の主観的な知覚や経験を評定するための約1時間程度の半構造化面接である。インタビューでは、子どもの性格、行動、関係性などについて具体的に問う。インタビュー反応は、Zeanah et al.(1996)のコーディング・マニュアルに基づき、安定型(Balanced)、非関与型(Disengaged)、歪曲型(Distorted)の3タイプに分類される。安定型は、子どもについての描写が豊かで柔軟で一貫しており、子どもへの情緒的関与や受容が高く、全般的にポジティブな情緒的トーンが強い。非関与型は、子どもからの心理的距離や情緒的関与の欠如が目立ち、描写は乏しく最小限であり、無関心や冷ややかさ、敵意が顕著である。歪曲型は、表象内にある種の歪みや偏りが認められ、例えば、養育者が他の関心事に心を奪われていたり、子どもに対して混乱、圧倒されていたり、役割逆転が認められたりする。語りは著しく不整合で一貫性に欠けており、ネガティブな情緒的トーンが強いという特徴を持つ。

子どものアタッチメント安定性(1歳半・6歳)

家庭での母子相互作用場面について観察を行い(約2時間) Waters & Deane(1985)のアタッチメントQソート法(AQS)を用いて、子どものアタッチメント安定性の評定を行った。子どもの行動について記述された90枚のカードを、それぞれ1:「まったく当てはまらない」から9:「非常に当てはまる」までの9段階に10枚ずつ振り分け、各カードにその段階の得点を付与する。そして、予め複数の専門家によって判断されたもっともア

タッチメントが安定している子どもの基準配列の得点(Waters, 1995)と実際の観察で得られた子どもの配列得点との相関を求め、Fisherのz変換した値を子どものアタッチメント安定性得点とする。

子どもの情動理解(2歳半・6歳)

生後2歳半:子どもに3枚の表情の絵(笑っている顔、怒っている顔、泣いている顔)を呈示し、「悲しいときのお顔はどれ?」と質問し、3枚の顔の絵から一枚選択させる課題を行った。喜び・怒り・悲しみの情動に関して、それぞれ2試行ずつ、計6試行ランダムな順序で実施した。そして、正答を1点、誤答を0点とし、合計得点を算出した。

生後6歳:5つのストーリーを読み聞かせ、ある場面における登場人物の感情を推測させる課題を行った。感情の回答には、喜び・怒り・悲しみ・ニュートラルの表情顔のカードから1枚を選択させる手法をとった。正答を1点、誤答を0点とし、合計得点を算出した。

子どもの問題行動

生後2歳半:子どもの問題行動を把握するため、Achenbach(1992)の Child Behavior Check List/2-3(CBCL, 2-3歳用)を使用し、母親による評定を求めた。CBCLは子どもの情緒的および行動的な問題を評価するための100項目から成るチェックリストであり、記述された子どもの行動について3件法(0:「当てはまらない」~2:「よく当てはまる」)で回答するものである。チェックリストは不安/抑うつ、引きこもり、睡眠の問題、身体の問題、攻撃的行動、破壊的行動の6つの症状尺度とその他の問題尺度から構成される。うち、攻撃的行動と破壊的行動の合計得点が外在化問題(Externalizing)、不安/抑うつと引きこもりの合計得点が内在化問題(Internalizing)として分類される。本研究では、この外在化問題尺度と内在化問題尺度のそれぞれの得点を算出し、分析に用いた。

生後6歳:子どもの問題行動を把握するため、Achenbach(1991)の Child Behavior Check List/4-18(CBCL, 4-18歳用)を使用した。外在化問題尺度と内在化問題尺度のそれぞれの得点を算出し、分析に用いた。

#### (3) 手続き

妊娠期

各家庭を訪問し、母親に子ども表象を評価するためのWMCIインタビューを実施した。

生後1歳半

各家庭を訪問し、母子相互作用場面の行動観察を行い、子どものアタッチメント安定性の評価を行った。

生後2歳半

各家庭を訪問し、情動理解に関する実験を行い、母親に子どもの問題行動の評定を求めた。

生後6歳

各家庭を訪問し、母子相互作用場面の行動

観察を行い、子どものアタッチメント安定性の評価を行った。その後、情動理解に関する実験を行い、母親に子どもの問題行動の評定を求めた。

#### 4. 研究成果

妊娠期における母親の子ども表象と生後の子どものアタッチメント安定性との関連性を検証するため、母親の子ども表象の3タイプを独立変数、生後1歳半および6歳における子どものアタッチメント安定性得点を従属変数として、1要因分散分析を行った。その結果、生後1歳半における子どものアタッチメント安定性に対する母親の子ども表象の主効果が有意であり( $F = 8.84, p < .01$ )、Tukeyの多重比較の結果、妊娠期において安定型であった母親の子どもは、妊娠期に非関与型あるいは歪曲型であった母親の子どもよりも、生後1歳半におけるアタッチメント安定性がより高かった(すべて $p < .01$ )。

同様に、妊娠期に安定型であった母親の子どもは、生後6歳時点においてもアタッチメント安定性が高い傾向にあったものの、統計的有意差には至らなかった( $p = .19$ )。

次に、妊娠期における母親の子ども表象と生後の子どもの(アタッチメント以外の)社会情緒的発達である情動理解との関連性について検証するため、母親の子ども表象の3タイプを独立変数、生後2歳半および6歳における子どもの情動理解得点を従属変数として、1要因分散分析を行った。その結果、生後2歳半および6歳における子どもの情動理解に対する母親の子ども表象の主効果は有意でなかった(それぞれ $p = .27, p = .73$ )。

また、妊娠期における母親の子ども表象と生後の子どもの(アタッチメント以外の)社会情緒的発達である問題行動(内在化問題および外在化問題)との関連性について検証するため、母親の子ども表象の3タイプを独立変数、生後2歳半および6歳における子どもの内在化問題得点を従属変数として、1要因分散分析を行った。その結果、生後2歳半および6歳における子どもの内在化問題に対する母親の子ども表象の主効果は有意でなかった(それぞれ $p = .14, p = .11$ )。同様に、生後2歳半および6歳における子どもの外在化問題に対する母親の子ども表象の主効果も有意でなかった(それぞれ $p = .46, p = .11$ )。

以上より、妊娠期における母親の子ども表象は乳児期(生後1歳半)における子どものアタッチメント安定性と関連するものの、幼児期(生後6歳)における子どものアタッチメント安定性とは有意な関連性が見られなかったことから、妊娠期の母親の子ども表象が子どものアタッチメントに持つより長期的な影響力についてはかなり小さいものと考えられる。また、アタッチメント以外の子どもの社会情緒的発達については、子どもの情動理解および問題行動いずれに関しても、妊娠期における母親の子ども表象との有意

な関連性は認められなかった。アタッチメント以外の子どもの発達との関連性については、今後さらなる検証の必要性があるものと思われる。

Table1  
妊娠期における母親の子ども表象別に見た  
子どもの社会情緒的発達

	安定型	非関与型	歪曲型
アタッチメント安定性	0.62	0.32**	0.28**
(1歳半)	(0.14)	(0.23)	(0.22)
アタッチメント安定性	0.59	0.47	0.41
(6歳)	(0.13)	(0.16)	(0.23)
情動理解	5.13	4.00	4.00
(2歳半)	(1.13)	(1.83)	(1.41)
情動理解	4.20	4.33	4.80
(6歳)	(1.32)	(1.58)	(1.10)
内在化問題	3.89	7.55	7.63
(2歳半)	(3.72)	(4.97)	(4.17)
内在化問題	2.22	4.89	5.86
(6歳)	(2.68)	(3.44)	(4.20)
外在化問題	8.89	12.00	9.50
(2歳半)	(7.01)	(5.46)	(4.87)
外在化問題	7.00	11.44	6.00
(6歳)	(4.30)	(6.31)	(5.42)

\*\* $p < .01$  (安定型 > 非関与型・歪曲型)

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

Motoshima, Y., Shinohara, I., Todo, N., & Moriguchi, Y. (2014). Parental behavior and children's creation of imaginary companions: A longitudinal study. *European Journal of Developmental Psychology*, **11**, 716-727. (査読有)

本島 優子 (2013). 家族の表出性と問題行動 母親の抑うつ症状と感受性を媒介として 心理学研究, **84**, 199-208. (査読有)

〔学会発表〕(計3件)

本島 優子 乳幼児期における子どものアタッチメントと社会情動発達：縦断的検討 日本発達心理学会第26回大会 2015年3月20日 東京大学(東京)。

本島 優子 妊娠期の母親の子ども表象  
と生後 6 歳の子どものアタッチメント  
安定性 日本心理学会第 78 回大会  
2014 年 9 月 12 日 同志社大学(京都)  
本島 優子 母親の情動認知と養育行  
動・乳児のアタッチメント安定性 縦  
断的検討 日本発達心理学会第 25 回  
大会 2014 年 3 月 21 日 京都大学(京  
都).

〔図書〕(計 1 件)

本島 優子 妊娠期における情動的コミ  
ュニケーション 遠藤利彦・石井佑可  
子・佐久間路子(共編)(2014). よく  
わかる情動発達 ミネルヴァ書房  
pp.148-149.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

本島 優子 (MOTOSHIMA, Yuko)  
山形大学・地域教育文化学部・講師  
研究者番号: 10711294